

平成29年3月31日に、長泥地区を除く村内の避難指示が解除されてから、間もなく丸2年が経過しようとしています。村内の居住者は、現在約1000人。村に戻る人の帰還は、今もゆるやかに続いています。

1月26日には、交流センター「ふれ愛館」で、「帰還者のつどい（帰還村民との懇談会）」が開かれました。帰村していない人も参加することができる懇談会として、お知らせ版などを通して、参加を呼びかけていたものです。

当日はあいにくの大雪で、参加した村民は十数名に留まりましたが、内容的には大変充実した懇談となりました。各課からの報告や具体的な質疑で情報の共有が図られた他、今後の村づくりへの意欲的な意見、課題に対する前向きな提案が相次ぎました。

例えば、「高齢者がいきいきと輝くような施策を。少子高齢化社会

のさきがけに」という建設的な意見。他の方からも健康事業やサロン開設などの提案がありました。また、「開拓者であった先祖の精神を失いたくない」「景観が失われつつあったとしても、人の心の美しさがある。『美しい村』であることに変わりはなく」といった意見や、復興を何としても成し遂げたい、協働しようという呼びかけもありました。さらには防災計画や通信事業に関する確認、交通機関や商業施設への要望、移住者・転入者の現状や農地保全に関する質問もあり、課題の共通理解が図られました。

村内の生活環境を高めていくためには、今回のような対話が大変重要です。今何が必要なのか、どんな情報が不足しているのか、さまざまな気づきのある懇談となりました。会の終わりには、菅野村長が、「ご意見を踏まえてしっかりとやっていきます。そう遠くない時期にまた懇談会を開きたい」と語り、参加者に感謝を述べました。

「広報いいたて」も、懇談会でいただいたご意見を紙面に生かし、情報発信を強化してまいります。復興のその先へ。新しい村づくりに、引き続きのご協力をお願いいたします。

交流センター「ふれ愛館」のホールで行われた懇談会には、村の幹部や各課長も出席。事業の報告を行い、質問や提案にも答えました。意見交換では、何人もの参加者が、故郷への思いや再興への決意を語り、職員を逆に勇気づけ鼓舞する場面が幾度となくありました。

